

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00456

研究課題名（和文）ボードレール『悪の華』における「北方」的特質の研究

研究課題名（英文）A Study of "Northern" Characteristics in Baudelaire's "Les Fleurs du Mal"

研究代表者

清水 まさ志（Shimizu, Masashi）

鳥取大学・地域価値創造研究教育機構・准教授

研究者番号：90762047

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：十九世紀フランスの詩人シャルル・ボードレール（1821-1867）が著した詩集『悪の華』の「北方」的特質を明らかにした研究である。ボードレールは、美術批評『1846年のサロン』において、ロマン主義を現代芸術であり「北方」の芸術であると述べたが、主著である詩集『悪の華』においても、その主張が取り入れられていることを、それぞれの部の内容を分析することで証明した。また、十九世紀前半において、ボードレールに影響を与えた作家、E.T.A.ホフマンやオーギュスト・バルビエとの関連性についても「北方」的観点から分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ボードレールの生きた十九世紀ヨーロッパは、産業革命と科学技術の進歩により社会における個人の生の意義が大きく問われる時代であった。ボードレールにおける「北方」性とは、この世の多様性の中で自らのかけがえない個性と運命を自覚し、それに基づく精神的な進歩において自らの理想を求めようとする態度を表すものである。グローバル化によって世界の多様性の意義が失われつつある現代において、さらにインターネットによって個人が匿名化していく現在の社会のなかで、ボードレールの態度は人間一人一人の生と精神性の意義をもう一度問い直し、人間性を回復する示唆を与えてくれるものである。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the "northern" characteristics of the poetry collection "Les Fleurs du Mal" written by the 19th century French poet Charles Baudelaire (1821-1867). In his art criticism "The Salon of 1846," Baudelaire states that Romanticism is a modern art and an art of the "northern," and by analyzing the contents of each part, it is proven that this argument is also incorporated in his main work, the poetry collection "Les Fleurs du Mal." In addition, the relationship with writers who influenced Baudelaire in the first half of the 19th century, E.T.A. Hoffmann and Auguste Barbier, is also analyzed from a "northern" perspective.

研究分野：フランス文学

キーワード：シャルル・ボードレール 悪の華 北方 ロマン主義 E.T.A.ホフマン オーギュスト・バルビエ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

十九世紀フランスの詩人シャルル・ボードレール(1821-1867)における「北方」性という着眼点は、美術批評『1846年のサロン』の「ロマン主義とは何か」の章に由来する。スタール夫人(1766-1817)が『文学論』(1800)において、ロマン主義を「北方」と「近代」、古典主義を「南方」と「古代」に関連付けて説明し、その捉え方がロマン主義時代において通説化していた。当時通説であったとはいえボードレールがなぜその図式を取り入れたのか、そしてボードレールの芸術論においてそれがどのような意義を持っているのか、この点に関する研究は存在しなかったため本研究を着想した。

### 2. 研究の目的

本研究は、ボードレールの詩集『悪の華』における「北方」的特質を解明することを目的とする。学位論文を科学研究費補助金(学術図書)を得て刊行した著書『ボードレール「北方」のインスピレーション』において、批評作品をもとに詩人の芸術論における「北方」的特質の重要性を分析したが、詩作品に関してほとんど分析できなかった。それゆえ、その後の一連の研究において詩作品、特に『悪の華』を取り上げて分析を進めていたが、今回の研究においてこのテーマに関する研究を補完し全体的なものとした。

### 3. 研究の方法

本研究において、大きく三つのアプローチに分け、テーマ論的方法によって、詩集『悪の華』における「北方」的特色を解明した。まずひとつ目のアプローチは、『悪の華』の構成に従い、それぞれの部の内容を考察するものである。第一部「スプリーンと理想」における芸術詩群および恋愛詩群、続いて「反逆」の部の分析をテーマとした。さらに第五部「死」の分析をテーマとした。二つ目のアプローチとして、ボードレールのその他の著作との関連で、「北方」的特質を考察するものである。ボードレールの芸術論における「風景」、「幼年期」、「ワルツ」の重要性をテーマとして考察した。三つ目のアプローチは、ボードレールが「北方」的特質を取り入れるさいに影響を受けた芸術家との関係を考察するものである。ドイツ人作家 E.T.A.ホフマン、同時代の詩人オーギュスト・バルビエとの関係をテーマとして考察した。こうした三つのアプローチにより、『悪の華』の「北方」的特色を多面的に立証し、ボードレールの芸術論の独自性と全体的な一貫性を明確にした。

### 4. 研究成果

以下、研究成果を三つのカテゴリーに分け、それぞれに含まれる研究論文および研究発表の要旨を記載する。

#### 1) 『悪の華』の構成に従い、それぞれの部の「北方」的特質を明らかにした。

研究論文「ボードレール『悪の華』「芸術」詩群を読む(2) ロマン主義と「北方」」(2022)  
『悪の華』第一部「スプリーンと理想」において、詩篇Ⅴから詩篇 XXI「美への賛歌」、および詩篇「宝石」を加えた 18 篇を、「北方」/「南方」の図式を取り入れることで考察した。その結果、詩篇Ⅴから詩篇 VIII「金で買えるミュージック」までの四篇、および詩篇 XVII「美」から詩篇 XX「仮面」までの四篇には、その図式が取り入れられていることが明らかとなった。多くの研究者が、これらの詩篇の解釈において古代と近代の歴史的な対比を読み取っているが、それに加えて「北方」/「南方」という地理的な対比を加えることは、ボードレールの美の相対主義を理解する上で重要であると考えられる。特に「南方」を古代と近代に分けてとらえることで、ボードレールの近代芸術に対する見方がより明確になった。

詩篇 IX「無能な修道僧」から詩篇 XVI「高慢の罰」に至る八編は、近代芸術の方法と近代芸術家の気質を描き出している。その八編においても近代における「南方」と「北方」の対比は取り入れられていることが見て取れた。しかし、この八編において、「北方」は単に地理的な意味合いを超え、キリスト教以降のヨーロッパ世界、「原罪」によって楽園を追放された世界、「倦怠」に陥った世界における芸術の方法と芸術家の気質が描き出され、すなわち神学的な意味合いにおける「北方」的芸術の方法と芸術家の特質が描かれていると考えられる。

研究論文「Deux climats et deux paysages dans le cycle de l'amour des *Fleurs du Mal* de Baudelaire」(2023)

『悪の華』第一部「スプリーンと理想」において、ジャンヌ・デュヴァル、サバチエ夫人、マリー・ドープランという三人の女性に捧げられた「恋愛詩篇」を、「風土」と「風景」の観点から読むことで、「北方」的な特質を考察した。恋愛詩群のなかには、二つの風土と二つの風景が描かれている。ジャンヌは「南洋」の風土を象徴し、マリーは「北方」の風土を象徴している。また、サバチエ夫人の美は「南方」の景色の特色で表現されているのに対して、マリーの美は「北方」の風景の特色で表現されている。『悪の華』初版においては、三人の女性のそれぞれの美の

特質を自然との関係で表現し、ジャンヌとマリーを風土的に対比させ、サバチエ夫人とマリーを風景的に対比させたと考えられる。しかし、再版においてサバチエ夫人をうたった詩篇「あまりに快活な女に」が削除されたため、サバチエ夫人の自然風景に譬えられる美しさの側面は失われることになった。それによって、三人の女性をそれぞれの自然美に譬える意図は損なわれ、ジャンヌとマリーの風土的な美の側面が強く打ち出されることになった。特に、マリーは「北方」のなかの理想の国を象徴し、もう一つの風土、東方や中国、熱帯性の島への出発点の国を表している。マリーが、南洋の風土への出発地であり帰着地を夢見させる女性だとすると、ジャンヌはその熱帯性の風土そのもの、すなわち旅の到着地を夢見させてくれる女性だと考えられる。そして、ボードレールは、ジャンヌとマリーという二人の女性を通して、二つの風土を行き来する旅の行程を夢見ていた。

研究論文「ボードレール『悪の華』『反抗』の部を読む 「北方」の夢」(2023)

『悪の華』の「反抗」の部を「北方」的な観点から考察した。「北方」/「南方」の図式に、近代 / 古代という歴史的な意義だけでなく、失樂園後の世界 / 失樂園前の世界という神学的な意義を加えたボードレールにとって、「反抗」に含まれる三篇は、失樂園後の世界に生きる人間とその養父となったサタンが、圧政的な神に対して連帯的に反抗し、地上において理想と無限を勝ち取らんと、自らの悲惨さを想像力によって慰める夢を描いていると考えられる。そして、ボードレールが「北方」に神学的な意味を与えたのは、単に恣意的なものではなく、ミルトンの『失樂園』においても参照された旧約聖書のイザヤ書の一節を典拠としていると推測される。一般に、「北方」/「南方」の図式は、スタール夫人の『文学論』において取り上げられ、ロマン主義時代に流布したとされるが、進歩主義思想を信奉し、神学的な解釈を容れないスタール夫人やそれを受け継ぐスタンダールは、「北方」に神学的な意義を与えることをしなかった。しかし、ボードレールは、終生キリスト教的な原罪をその思想の中心に持っていた以上、『失樂園』を訳したシャトーブリアンの影響から「北方」に神学的な意義を付け加えることになったと考えられる。

研究発表「太陽よりも美しい北極のオーロラを探す人」 ボードレール『悪の華』第5部「死」について」(2023)

『悪の華』の第五部「死」の分析を通して、詩集の結末において、詩人が死と「北方」の関係をどのように関連付けてとらえていたかを明らかにした。詩集『悪の華』の基本的な構成は、詩人の誕生から死に至るひとつの生を描くことにあり、そして、その人生の行程を「旅」に譬える詩人の意図は、第二版の最後に詩篇「旅」を付け加えたことでより明確になった。散文詩「この世の外ならどこへでも！」と照らし合わせると、詩篇「旅」において「暗闇の海」へ船出するとき、世界地図上では北極を目指すと考えられる。北極圏とは「死のアナロジーである国々」であり、北極とは地獄のアナロジーとして捉えられる。さらに、1846年に発表された「愛に関する慰めの箴言抄」の「北方」の男の記述を参照すると、このイメージが詩人にとって古くからあり、北極への旅、それは飽くなき理想を求める旅でもある。

死への旅が、北極への旅としてイメージされるとき、「深淵の底」であるツンドラにおいて見いだされる「新しきもの」のイメージとは、「北方」の男の記述で述べられていた、理想としての「太陽よりも美しい北極のオーロラ」であると考えられる。北極のオーロラとは、まさに地獄的な理想の象徴であり、「悪の華」の象徴ではないかと考えられる。詩集のタイトル『悪の華』を、悪の地が「北極」であり、その地の花が「オーロラの光の束」であると読み替えると、「北極のオーロラ」のイメージでとらえ直すことができる。「悪の華」=「北極のオーロラ」は、まさに詩集の「北方」的特色を明らかにするものである。

2) 個別のテーマを設定することで、ボードレールのその他の著作との関連において『悪の華』の「北方」的特質を明らかにした。

共著書所収研究論文「ボードレールにおける風景と個性」(2018)

ボードレールが目指す、外的自然をただ写すことなく芸術家自身の個性を映し出す風景画とはどういうことなのか、そしてどのように大都市の風景画が実現されるのか、その思考をたどり、『悪の華』第二部「パリ情景」の冒頭詩篇「風景」を読み解いた。

詩人にとって「自然の研究」は、リアリズムの画家のように、眼前の風景の外観をカメラのように掬い取るのではなく、想像力を駆使して感じそして考え抜くことであり、外的自然の要素によって自らの精神的世界を表現するためである。そして「個性」とは、こうした過程を通して形成される自然界と精神界の混合物を指す。それゆえ風景画は、自らの「個性」のアレゴリーとして構成されていなければならない。さらにボードレールは、美術批評「現代生活の画家」において、外的自然の研究から内的個性を形成し、そして記憶を基盤として自らの精神世界を表現するという一連の芸術活動を、「見る能力」と「表現する力」という二重の側面でもとらえて定式化した。詩篇「風景」は、こうしたボードレールの思考を十全に表現したものであり、風景が自らの個性の表現であるという方法論を述べると同時に、都市の風景画という新しいテーマの実作となっている。何よりボードレールにおいて、芸術活動における「個性」の重要性とは、この地上の生=「悪」の世界を感じ考えて真に生きなければ、無限であり永遠たる美=「花々」を表現することはできないという主張に基づく。

研究発表「生きること、生き直すこと ボードレールにおける幼年期の発見」(2021)

ボードレールにおける「幼年期」の重要性を明らかにした。『悪の華』の詩人にとって芸術における幼年期の重要性の問題は、美の固有性の根源となる芸術家特有の気質の解明という 1840年代から続く問題意識の中でとらえることができる。ボードレールの著作の中で、幼年期の重要性を語る主要なテキストは、トマス・ド・クインシーの二つの作品を翻案した「阿片吸飲者」である。ド・クインシーの著作を翻案する過程で、その重要性は個性の源泉となる気質の問題とその気質に基づく方法として明確な形を取るようになる。特にボードレール自身が加えた部分、「この時からして、彼の生涯の第一の部分が第二の部分に入り、それと混じて、同じくらい緊密で異常でひとつの全体を作り上げた。彼は自らの新たな生活を、第一の生活を生き直すことに費やした。」という部分が注目される。幼年期とは、神が与えた試練であり、子供である自分は、ただそれを耐え忍ぶしかなかった。しかし大人になってから、その幼年期の経験の意味を解読することができるようになる。それは神が与えた運命を解読し、地上に生まれた自らの存在と使命を問い直すことである。幼年期は「生きること」、そして成年期はそれを「生き直すこと」であり、そして芸術行為もまた「幼年期」を「生き直すこと」であると考え、ボードレールは運命と芸術活動の関係性、そして芸術作品とは神が与えた自らの運命を解読し表現したものであるという結論を見ることになる。

研究論文「ボードレールとワルツ」(2021)

ボードレールと音楽の関連性を、十九世紀に大流行したワルツの観点から考察した。詩人は全著作において五回しか「ワルツ」の語を記していないが、韻文詩「夕べの諧調」や「旅」、散文詩「旅への誘い」といった主要作品に現れ、さらに詩人が翻訳したポーの短編「アッシャー家の崩壊」と「赤死病の仮面」に現れる。

「夕べの諧調」は、テオドール・ド・バンヴィルの詩篇「ウェーバーの最後の想い」の冒頭に引用されたホフマンの一節との類似から 1845 年頃の制作と考えられる。バンヴィルの詩の題は、現存のピアノ曲の題であり、当時ウェーバー作と考えられていたワルツである。実際にはライシガー作曲であったが、このワルツが天才作曲家の白鳥の歌であるという伝説は広く流布して消えなかった。ポーはこの伝説を信じて「アッシャー家の崩壊」に登場させ、バンヴィルもまた恋人の死を悼む詩篇の題に用いた。ボードレールもまた「夕べの諧調」において、このワルツを参考にした可能性がある。

散文詩「旅への誘い」において、題がウェーバーの本物のワルツを意識したものであることが述べられるとともに、同題の韻文詩は、歌謡的形式で読者の視線を巡回させる構成はワルツ的であり、「恋愛への誘い」に通じる。ワルツは、『悪の華』第二版の掉尾を飾る「旅」にも現れ、人間の生の活動を戯画化し、ポーの「赤死病の仮面」では、踊り続けて赤死病を忘れさせる十九世紀の「死の舞踏」とみなされる。詩人は、当時の「現代性」であるワルツが、「恋愛への誘い」であると同時に「死への誘い」であることを見抜き、「夕べの諧調」において「メランコリックなワルツとやるせないめまい」という一行に凝縮させたと考えられる。

3) ボードレールが「北方」的特質を取り入れるさいに影響を受けた芸術家との関係を明らかにした。

研究論文「L'influence d'Hoffmann chez Baudelaire autour du 《voyageur enthousiaste》」(2019)

ドイツの作家ホフマンがボードレールに与えた影響を「熱狂」という観念を通して明らかにした。『1846年のサロン』において、ボードレールはフランス的精神を描く画家オラース・ヴェルネを批判するため、ホフマンに由来する「熱狂の旅人」という表現を用いた。この表現は、モデルニテの美を追求する芸術家像を描くテーマの発端に位置している。

フローベールを「美の熱狂者」と呼び、ハシッシュ吸飲者を「熱狂者」と呼ぶように、詩人は「熱狂者」「熱狂的」という語を明確に意識して用いている。さらにその語を巡って二人の芸術家との関連が浮かび上がる。一人は、ホフマンに大きな影響を受け、ネルヴァルとともに自らを「熱狂の旅人」と呼んだゲーティエであり、もう一人はアメリカのホフマンと呼ばれたポーである。ボードレールは、ポー論において「熱狂」を「情熱」と区別し詩の目的と関連付けて述べた箇所を、ゲーティエ論において引用し、ゲーティエをまさしくコスモポリットな美の熱狂者として描き出すことで両者を関連付けている。1846年における「熱狂の旅人」という表現は、詩人がホフマンから受けた深い影響を示すとともに、ロマン主義の先輩詩人ゲーティエを意識したものだと考えられる。さらに 1850年代には、ポーの翻訳を通してその表現の意味内容が重要性を増し、モデルニテの美を求めるコスモポリットな旅人を描く「現代生活の画家」へと受け継がれていく。

共著書所収研究論文「1851年の「スプリーンと理想」 オーギュスト・バルビエとボードレール」(2020)

ボードレールと同時代の詩人オーギュスト・バルビエの影響関係を検証した。1851年において、ボードレールは、七月革命とともに有名になったバルビエと、二月革命において有名となったピエール・デュポンを比較し、それぞれが当時の公衆の思念と感情を表現した芸術家として評価した。また、ボードレールはバルビエの詩集『風刺詩』『イル・ピアント』『ラザロ』に大きく影響

を受けている。例えば詩篇「無能な修道僧」においてバルビエの「カンボ・サント」の影響は大きく、またバルビエの美術批評的視点を参考にしている。さらに、近代都市ロンドンに住む民衆の悲惨さを描く『ラザロ』には「スプリーン」と題された詩が含まれ、ボードレールがパリのスプリーンを描くさいに大いに参考にしたと考えられる。

しかし、ボードレールは三つの点でバルビエを批判している。まず、バルビエの詩が当時の社会状況と切り離せないため時代が過ぎるにつれ忘れられること、次に詩の目的が美ではなく道徳と有用性にあること、最後にバルビエが文法や語の用法を疎かにしたため言葉の芸術として詩句の完成度が低いことである。こうしたバルビエに対してボードレールは、同時代の公衆の支持が得られなくとも、詩の目的において美を据え、言葉の芸術として完璧さを求め、死と倦怠に支配されたこの世において理想を追求する。バルビエに対してボードレールは、参考にし共感する点もあるが、自身の詩観とは明確に相違していることを十分意識していた。

以上の研究成果によって、ボードレールが詩集『悪の華』に「北方」/「南方」という図式を内面的に取り入れ、「北方」的特質によって自ら固有の美を表現していたことを明確にした。今回の研究によって、これまでの『悪の華』の解釈にはない新しい解釈を提出することができた。

ホフマンやバルビエとの関係を明らかにすることは当初の予定にはなかったが、「北方」的特質という観点でボードレールとの関連を探ったところ興味深い事実をいろいろ明らかにすることができた。また、2021年はボードレール生誕200周年記念の年であり、その機会に「シャルル・ボードレールをめぐる詩と音楽～愛する人と夢見る風景～」と題して、『悪の華』に含まれる詩にメロディーをつけた歌曲やそれに関連するピアノ曲を演奏するレクチャー・コンサートを宮崎県立芸術劇場において開催できたことは、ボードレールの詩の魅力を一般に広く伝える機会となり、これもまた大きな成果のひとつに数えたい。その演奏会を準備する過程で、十九世紀前半にドイツ人作曲家ウェーバー作と信じられていたワルツの存在に気づき、ポー、バンヴィル、そしてボードレールもそのワルツを作品に取り入れていたことを明らかにできたことは予期しない発見であった。

研究を進める過程で、当初の計画にない内容を付け加えることで、研究内容が広がり厚みを増したが、一方で当初予定していた『悪の華』第二部「パリ情景」の分析が十分でなかったことが悔やまれる。それゆえ、今後は「パリ情景」の分析を補いつつ、「パリ情景」の企図をさらに進めた散文詩集『パリの憂愁』における「北方」的特色を研究していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 清水まさ志	4. 巻 37
2. 論文標題 ボードレール『悪の華』 「芸術」詩群を読む(2) - ロマン主義と「北方」 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 清水まさ志	4. 巻 36
2. 論文標題 ボードレールとワルツ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 43-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 清水まさ志	4. 巻 115
2. 論文標題 L'influence d'Hoffmann chez Baudelaire Autour du "voyageur enthousiaste"	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス語フランス文学研究	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 清水まさ志	4. 巻 34
2. 論文標題 Deux climats et deux paysages dans le cycle de l'amour des Fleurs du Mal de Baudelaire	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部『フランス文学』	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 清水まさ志	4. 巻 38
2. 論文標題 ボードレール『悪の華』「反抗」の部を読む - 「北方」の夢 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 筑波大学フランス語・フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 清水まさ志
2. 発表標題 風土と風景 - ボードレール『悪の華』恋愛詩群について -
3. 学会等名 2022年度日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 清水まさ志
2. 発表標題 生きること、生き直すこと - ボードレールにおける幼年期の発見 -
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所主催ボードレール生誕200周年記念シンポジウム「 時間-生 芸術の研究 - ボードレールとその受容」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水まさ志
2. 発表標題 ボードレールとオーギュスト・バルビエ
3. 学会等名 第39回ボードレール研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水まさ志
2. 発表標題 ボードレールにおけるホフマンの影響 - 「熱狂的旅人」を巡って
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会2018年度秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水まさ志
2. 発表標題 「太陽よりも美しい北極のオーロラを探す人」 - ボードレール『悪の華』第5部「死」について -
3. 学会等名 2023年度日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山上浩嗣、井本秀剛、林千宏、清水まさ志、他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 803
3. 書名 CORRESPONDANCES コレスポンドダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	

1. 著者名 坂巻康司、立花史、津森圭一、廣田大地、清水まさ志、岡部杏子、田島義士、深井陽介、松村悠子、中畑寛之、三田順、合田陽祐、今井勉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 392
3. 書名 象徴主義と 風景 ボードレールからプルーストまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------